

内田康夫
倉敷殺人事件

中公文庫



中公文庫

くらしきさつじん じ けん
倉敷殺人事件

定価はカバーに表示してあります。

1997年3月3日印刷

1997年3月18日発行

著者 うちだ やす お
内田康夫

発行者 嶋中鵬二

発行所 中央公論社 〒104 東京都中央区京橋 2-8-7 振替 00120-4-34
TEL 03-3563-1431(販売部) 03-3563-3664(編集部)

©1997 CHUOKORON-SHA,INC. / Yasuo Uchida

本文・カバー印刷 三晃印刷 用紙 王子製紙 製本 小泉製本

ISBN4-12-202809-4 C1193

Printed in Japan

乱丁本・落丁本は小社販売部宛お送り下さい。送料小社負担にてお取り替えいたします。

中公文庫

倉敷殺人事件

内田康夫



中央公論社

目次

プロローグ

7

第一章 アイビースクエア、真昼の死

31

第二章 「タカハシ」の謎

65

第三章 愛憎の岐路

111

第四章 殺意の源流

147

第五章 もつれる糸

204

第六章 高瀬舟

254

第七章 飛驒片麻岩

312

エピローグ

353

自作解説

360

倉敷殺人事件

プロローグ

午後五時半を過ぎると、上野駅は勤め帰りのサラリーマンやオフィスガールの人波でごった返す。おまけにこの日は金曜日——、週休二日制の会社が多くなったせい、近ごろは金曜の夜から遠出しようという旅行者が増えた。しかも明日から十月十日の体育の日にかけては三連休である。広いコンコースには、若者を中心にしたグループ旅行の人々が早くから列をつくりはじめていた。

赤字の国鉄としては、お客の増えるのはありがたいけれど、それに比例してゴミが増えるのは、ここで働く者たちにとっては悩みのタネだ。老朽化の進む上野駅はただでさえほこりっぽくてしょうがない。そのゴミやほこりは、建物の底から湿気と一緒に湧いてくるような、かび臭いにおいに染まって、この駅特有の陰気さをつくり上げてしまう。

終戦後、ここの地下道に無数の戦災孤児や浮浪者たちが住みついたことがあって、一種

独特の臭気を発散させていたものだが、それ以来、そのにおいがしみついたような気さえする。いくらきれいに掃除しても、上野駅には、ほかのどの駅にもない、上野駅だけのおいがあるのである。

依田登志江は、売店の前の通路を掃きながら、ふと、遠いそのころのことを思い出していた。登志江も戦災孤児の一人である。終戦後しばらく、上野駅の地下道にいたことがあった。じきに引取り手が現われて、群馬のほうへ去ったが、成人してから東京へ出て、いろいろあったあげく、いつのまにか上野駅のKIOSKに勤めるようになった。まったく人生というものは思いもかけぬ展開をするものだけれど、上野駅には、そういう人生の哀歓を知り尽くした老人のような、親しみと悲しみが備わっている。

束の間の感傷に浸りながら、ゴミとほこりに汚れた通路を掃除していると、小走りに来た靴先が登志江の持つほうきに蹴つまずくようにして通り抜けた。

（危ないわねえ——）

反射的にほうきを引っ込め、登志江は通り過ぎた靴の持ち主である若い男の背中を睨みつけてやった。男はそんな登志江には気付く気配もなく、すぐ前を行く年輩の男に声を掛けた。

「××先生！」

若い男はそう言った。辺りの喧騒けんそうで聴き取れなかったためか、「××」がどういう名前であつたか——までは登志江は記憶していないし、後ろ向きのその男の顔も見えてはいない。しかし、その男が若かつたことは分かつたし、それに、振り向いた年輩の紳士の顔ははっきり見えている。

「おお、○○君じゃないか」

紳士はそんなふうなことを言ったようだ。二人はひどく懐かしい様子で挨拶を交わしながら、高架ホームのほうへ歩いて行つた。そこまで見とどけてから、登志江はふたたび作業に戻つた。

*

夜の街を散歩するには、いまがいちばんいい時候かもしれない。夏のように、むやみやたら騒々しいばかりの人出もなく、少しアルコールの入つた頬をかすめてゆく夜風も、適当に冷たくて心地こころよい。

（それにしても、どこまで歩くつもりかな？——）

草西英は少し汗ばんできた掌を気にしながら、手をつないで歩く勝浦修二の横顔をそつと見上げた。

勝浦はさつきから怒つたような顔をして、一所懸命、決断の時を模索もさくしている様子だ。

そんな勝浦を見ていると、女ってなんて不自由なんだろう——と、英は思ってしまった。実際、男には許されても、女ゆえにしてはならないことが、この世の中には多すぎる。そりゃ、肉体的な構造上の違いによる制約——たとえば立ち小便なんかができないなんてことはしょうがないけれど、社会制度や風俗習慣などがそうだからというだけで、謂れなく押しつけられている制約は、まったく迷惑なはなしだ。

げんに、いまがそうなのだ。英のほうは早く誘ってもらいたがっているのに、勝浦の煮え切らない態度ときたらじれったくて仕方がない。いったい、もう何軒、ホテルの看板を通り過ぎたことだろう。

勝浦にその気がないのならともかく、彼だって、今夜こそ——とひそかに心に期しているに決まっている。

だからこそ、ちょっと気張って豪華な食事を御馳走して、「少し、その辺を散歩しようか」とか言って、新宿の裏通りなんかをそぞろ歩きながら、ホテルに誘い込むチャンスを探っているのではないのか。

英にしたって、もし誘われたら、拒むつもりはない。もちろん、一度か、たぶん、二度ぐらいは、逡巡する素振りをするかもしれないけれど、気持ちとしては、充分、受入れ態勢に入ったつもりだ。けれども、こっちから「入りましようよ」なんて言えたものでは

ない。それがつまり、「女のたしなみ」というやつだ。

父の玉^{ぎよくしゅん}俊から、「なんだおまえ、まだ処女なんて面倒くさいものをぶら下げているのか」と笑われた時、英は本当に腹が立った。父に対してではなく、笑われた自分に対して——ひいては、勝浦修二に対してだ。

英の父親は僧職である。平たく言えば、お坊さんだ。『英俊寺』という浄土宗の寺の世襲の住職で、自ら生臭坊主を認めているような、風変わりな人間だ。よく言えば「豪放磊^{らい}落^{らく}」、悪く言うところ、「八方やぶれ」ということになる。

『英』という名前の由来を聴いた時、英は父を殺すか、自殺するか、本気で思いつめたものだ。

子供のころからずっと、『英』をちゃんと間違えずに呼んでくれた人は一人もいない。

「えい」とか「ひで」なんていうのが多く、中には「はなぶさ」なんて呼ぶ者もいた。確かに『英』と書いて「はなぶさ」と読ませる苗字^{みょうじ}の人はいるのだから、無理もないけれど、それにしたって、「くさにし はなぶさ」なんて、どう考えたってひどすぎる。

「ひかり——です」と言うところ、一様に「えーっ?」と、信じられない顔になる。

「ひかりなんて読めるの?」

まったくそのとおりなのだ。どの辞書を捜したって、『英』を「ひかり」と読ませるな

んてことは書いていない。わずかに、人名の当て読みとして、「てる」という読み方があるらしい。

「照る——だから、光じゃないか」

というのが玉俊の言い分だ。

「それにしたって、読めるような名前にしてくれればいいじゃない。たとえば英子とか英美とか……」

「じつは、生まれてくるのが男の子だとばかり思っていたもんだからな。跡継ぎ用の名前しか考えていなかったんだ。それが『玉英』で、女の子だったから、玉を取ったというわけだ」

真面目くさって言われた時は、死にたくなった。それ以来、英は他人に名前の由来を訊かれるのが、怖くてならない。

そんな父親だから、子育てのほうもずいぶんいいかげんなものだったにちがいない。母親の正子も、そういう玉俊が好きで一緒になったくらいだから、よほど変わっている。英に続いて、年子で妹の薫かおるを生んだのだが、それから二十年以上経たつというのに、オトナらしい落着きが生じるどころか、娘顔負けの、あっけらかんとした日常である。この夫婦の手で、よくもまあ娘二人が立派に（と英は思っている）成長したものではあった。

もつとも、変わっているのは両親ばかりでなく、英もちゃんとその血筋を受け継いでいる。子供のころからお転婆で、近所の悪餓鬼どもを集めて墓地の中を走り回っては、檀家の人たちの輦轎を買っていた。

小さなことにこだわらない、さっぱりしたところがあるかと思えば、ひと倍の負けず嫌いでもあった。父親をして、「おまえは男ならよかったんだがねえ」と、しばしば嘆かせるほどだから、ふつうの女の子とは一風も二風も変わった性格に生まれついてきたようだ。

本人にはまるでその気がないし、玉俊もあまり期待していなかったのだが、一応、跡継ぎの婿取りをしても困らないように——と、仏教系の大学に入った。それが進学の条件でもあった。仏教系といっても、いまは総合大学で、べつに仏教を勉強する必要はないのだが、それにしても、選りに選って、英は地質学を専攻することにした。

「なんだおまえ、墓石の研究でもして、ひと儲けしようっていうのか」

玉俊は呆れて、訊いた。

「やあねえ、そんな商売じみた発想しかできないの？」

軽蔑してみせたが、英の発想もそう威張れたものではなかった。要するに、女性で地質学なんかをやる人間はほとんどいなかったから——という、ただそれだけの理由である。

しかし、このアイデアは大成功だった。学生はもちろん、教授にも珍重され、大切にされ
たし、なによりも、女同士特有の妙な競争がないのがよかった。

それに、研究や合宿のたびに山歩きができるのも楽しかった。一般の女子学生がテニス
だヨットだと遊びほうけているあいだ、英は北海道から九州まで、夏休みごとにゼミの合
宿に参加して、思う存分、充実した大学生活を送ることができた。もちろん男子学生の中
に、英のほかにもう二人だけが女性という環境だったが、汗と泥に塗れる毎日だったので、
柔弱な恋愛問題など起きる暇もなかった。

『地質学』は就職にも役立った。銀行の入社試験で、面接の時、志望の理由——と訊かれ
て、「子供のころから固いことが好きでしたから……」と答えた。

「なるほど、お寺で生まれて、大学では岩石の研究ですか。これは固そうですね」

試験官のひとりかとぼけた口調で言い、どっと笑いになった。あとで聴くと、その試験
官は重役で、庭石を集めるのが趣味だったのだそうだ。おそらくそれが決め手になったら
しく、英は合格し、玉俊は「あそこは金がたくさんあるからいい」と、まるで銀行の金庫
を賽銭箱さいせんばこと勘違いしているようなことを言って祝福してくれた。

同じ年に、国立大学の一期校を卒て入社したのが勝浦修二だ。同期ということ、なに
かと顔を合わす機会が多かったせいで、いつとはなしに親しくなっていて、それでも、恋愛感

情が芽生えるまでずいぶんかかった。それというのも、英のさっぱりした性格もさることながら、勝浦の引っ込み思案のせいだ。「秀才」の噂うわさどおりの仕事ぶりで、早くから社内でも注目される存在となったが、こと女性とのこととなると、まったくのボンボンでしかなかった。銀行という堅い職種を選んだだけに、万事に慎重であろうとするのなら理解できるけれど、勝浦の場合は、むしろ、純粹培養で育った生物のように、女っ気に汚染された経験がないためなのだ。

コンピュータを駆使した経済分析を、あざやかにやってのけたり、会議での積極的な発言からは想像もできないほど、英と二人だけになった時の勝浦は、その言葉が大嫌いな英でさえ、「女の腐ったみたい」と言いたくなるくらいに消極的な人間に変貌へんぼうしてしまふ。だから、交際が始まって一年以上も経ったいまも、この二人はキスを交わしたこともさえないかった。

その勝浦が一念発起したかのように、まなじりを決して英を誘った。

「今晚、一緒に食事をしてくれませんか」

（ばかみたい——）と英は呆れた。何もいまさらそんな断わりを言わなくなつて、いつもだって、喫茶店で待ち合わせて、レストランや、時にはラーメン屋で食事をしているではないか——。